

聖書：ルカの福音書16章1～13節

説教：神に仕えるとき

1 これはどういう意味なのか

今年最後の礼拝の時を迎えています。この一年、ひとりひとりにいろいろなことがあり、そのたびに心が振り回されてきたかもしれません。もういちどみことばに耳を傾け、真理にとどまりたいと願います。

ここに出て来る会計係。今風に言えば会社の金を横領し、そのうえ勝手に帳簿を書き換える改ざんまでしています。こんなことが赦されるはずはない。きっと、このあと社長に大目玉を食らうに違いないとだれもが思います。ところが8節にこうある。「この世の子らは、自分たちの世のことについては、光の子らよりも抜け目がないものなので、主人は、不正な管理人がこうも抜け目なくやったのをほめた。」主人が管理人をほめた？なんとイエスさえもがこの管理人がしたことを高く評価しているように聞こえます。なにかの間違いではないか。いったいどのように理解したらよいのでしょうか。

2 管理人のしたこと

1) 主人の金を利用する

もう一度この管理人がしたことを見ていきましょう。「そこで彼は、主人の債務者たちをひとりひとり呼んで、まず最初の者に『私の主人に、いくら借りがありますか』と(言った。)」

このなかの「私の主人」ということばに注意してください。管理人は主人のお金を預かり、管理していました。誰かにお金を貸した

としても、それは自分のお金ではありません。当然主人のお金です。それなのに、主人に無断で主人のお金を操作し、自分の利益となるようなことをしています。これが、あとで主人から、おまえは抜け目がないと言われたことの理由の一つになります。

2) 証文を書かせる

それだけではありません。管理人は証文を書かせています。証文とは、あなたはこの額だけ借金しましたという契約書です。その契約書をその場で書かせます。借金の額が半分になった契約書。借金の額が二割減った契約書です。借りた方にとってこんなありがたい話はありません。みな喜んでサインしたでしょう。

借金を半分にするからという口約束だけでは、証拠がありません。後になってから主人に、そんな約束をした覚えはないと言われてればそれでおしまいです。ところが証文があります。証文がある以上、主人でも従うしかありません。契約書はそれだけの力を持っています。

3) たとえ話が語る真理

私たちが持っている常識に照らせば、この管理人のしていることはとても良いこととは思えません。ところが主はこう言われるのです。9節。「そこで、わたしはあなたがたに言いますが、不正の富で、自分のために友をつくりなさい。そうしておけば、富がなく

なったとき、彼らはあなたがたを、永遠の住まいに迎えるのです。」

にわかに理解できません。ひとつひとつ整理していきましょう。

あの管理人は何をしましたか。自分の利益のために、主人の金を操作しました。管理人の側から見ればそのとおりです。でも、このことを視点を変えて、借金をしていた人たちの側から見たらどうなるでしょう。ある日突然呼びだされ、何の話だろうかと行ってみたら、その場で借金が大幅に減りました。こちらは何かをしたわけではありません。向こうから一方的に提案されました。思わず、「管理人さん、ありがとう。」と言って、飛び上がりたくなります。

ほかの人から見れば不正なやり方にしか見えません。でも、借金を払えずに苦しんでいる人たちにはそんなことは関係ない。不正であろうがなかろうが、管理人に感謝したくなるほどうれしいことには変わりありません。このたとえ話のポイントはここにあります。

3 主がされたこと

1) 罪というところで友となられる

イエスは神の真理を解き明かすためにたとえ話を語ります。管理人のことを通して主の姿について二つのことが見えてきます。その一つ目。

管理人は、主人のお金を勝手に操作して、いざという時のために友人を一杯作りました。会社を首になったら、この友人たちが自分を助けてくれる。そんな身勝手な動機から始めたことです。お金という利害が絡んでおりますから、これで友人と言えるのかと思うのですが、それでもイエスはこの人たちも

友人だと言われます。

管理人は、自分の利益のために罪を犯しました。いっぽうイエスは、ご自分の利益のために何かをするのではなく、ほかの人たちの利益のために、自ら進んで罪人となられました。イエスと管理人がしている動機はまったく正反対です。けれども罪というところから見ると、結果としてイエスはこの管理人と同じ立場に立たれたのです。

管理人は、不正な富を使って友人をつくろうとしました。イエスは、あえて罪人となる道を歩まれながら、罪人である私たちと友人になろうとされます。それが一つ目です。

2) 不正な方法にさえ見える救いの方法

この管理人したことを通して教えられるイエスの姿。その二つ目を見ていきます。

旧約聖書には、神に対して罪を犯した者は、その罪を赦していただくために、動物をささげるか、贖い金というものを支払わなければならないと教えられています。当然のことですが、その金額は罪の大きさと比例します。私たちが抱えている罪はどうか。あまりにも大きいので、贖い金も莫大です。到底支払うことなどできません。負債を抱え込んで途方に暮れている。それが私たちの姿です。

ところがあるときイエスは、借金を抱えて苦しんでいる私たちを呼び出し、こう言われました。「ここに証文があります。すぐにすわって、そこにゼロと書きなさい。」次の人にも同じように言われます。「さあ、ここにあなたの証文があります。そこにゼロと書きなさい。」

この借金には必ず返済期限というものがあります。いつ返すことになっていたのか。さばきの日です。そのとき返済できなければ、

永遠のさばきに入れられます。それを聞いて
厳しいと言う方がいます。でもだれかにお金
を貸したときのことを思い出してください。
たとえ千円でも返してもらえなかったなら、
ふんふんと怒るでしょう。ならば、神に対し
て厳しいという資格はありません。

イエスは、私たちには到底払うことのでき
ない莫大な借金を、いとも簡単にゼロに書き
換えてくれたのです。

ここでよく考えてください。そのお金は誰
が貸したのですか。父なる神が私たちに貸
したお金です。イエスは、その借金を書き換
えてゼロにしてしまったのです。あの管理人
がしたことと同じです。

このたとえ話を読んで、なんと言う不正な
ことをするのか。みなあきれ果てます。では
イエスの場合はどうなのでしょう。イエスは
証文をゼロに書き換えました。やがて来るさ
ばきの日にこの証文が父なる神の前に提出
されます。イエスがご自分の血で染めた印鑑
がそこに押されています。ご自分の愛する子
がからだを裂き、血を流し、いのちを捨てて
判を押した証文です。本物の証文なのです。
それをご覧になって、「あなたの罪は完全に
贖われている」と、父なる神は宣言されます。

このたとえ話に即して言うなら、イエスは
勝手に主人の帳簿を書き換えたようなもの
です。私たちが抱えている借金がゼロになっ
たのは、不正とも思える方法だったのです。
不正はさばかれなければなりません。だれが
さばかれるのか。私たちではない。帳簿をゼ
ロに書き換えた主がさばかれました。そのよ
うにして私たちは救われていたのです。

3) 神に仕えるとき

最後に9節のみことばを取り上げて「神に

仕える」とはどんなことなのかを確認します。

このたとえ話には不正の富ということば
が何度も出て来ます。不正の富を罪と言い換
えてみましょう。そうしてから9節を読みま
す。「そこで、わたしはあなたがたに言いま
すが、不正の富で、自分のために友をつくり
なさい。そうしておけば、富がなくなったと
き、彼らはあなたがたを、永遠の住まいに迎
えるのです。」

「罪で、自分のために友をつくりなさい。」
なんのことでしょう。罪というところで私た
ちの友となってくださったのは誰ですか。主
イエスです。その不正の富はいつなくなった
のですか。先ほど言いました、友となられた
イエスが証文をゼロに書き換えてしてくれま
した。その瞬間、不正の富はなくなりました。

莫大な借金をゼロにしてもらったなら、み
なさんどうします。うれしくてうれしくて手
をたたいて喜びます。人から言われなくても
小躍りしてばんざいと叫んで喜びを表現す
るでしょう。ゼロに書き換えてくれた方に感
謝するでしょう。

その時私たちはなにをしていることになる
のか。神に仕えているのです。借金がゼロ
になって大喜びしているとき、その瞬間、神
に仕える者となっています。

自分は本当に神に仕えているのかと、自信
を持ってない方もいるでしょう。自信をもっ
てください。主に救われたという喜びをもっ
ておられるなら、もうそれで十分に神に仕え
ておられます。

新しい年も、この喜びを味わっていきたく
と願います。